

# 小學校入學前一ヶ月間の保育

東京市京橋昭和幼稚園

白 根 美 智 子

小學校入學前一ヶ月間の保育を申し上げます、先づ小學校と幼稚園との連絡をどうするかといふ事が、最も大切な問題だと思ひます。勿論もう長い経験をお重ねになりました方は、御銘々に適當に解決なさいますして最善の方法をおこりになつていらつしやいます事存じますけれど、始めて學齡前の子供をお持ちになりました方、又は私立幼稚園の方で平素直接小學校と關係がございません爲にあまりこゝいふ問題をお考へになつていらつしやいません方々には或は何かの御参考にもならうか、自分の淺い経験を願す、筆をさりました様な次第でございます。でも僅か一年の経験でございますから或は大層誤つた観方考へ方をしてゐるかも知れません。その節は御指導仰けましたら幸に存じます。

近時幼児教育がさみに盛になりまして、都會の市立小學校

校には競つて附屬幼稚園が設けられ、小學校でも修業主義・生活主義色々研究されてゐる様で誠に喜ばしう存じます。が、實際には極めて少數の小學校を除いてはまだ、昔の儘の教授方法が多いのではないかと思はれます。こう申しましては小學校からお叱りを受けるかとも存じますが、切角幼稚園で一年なり二年なりを無理なく伸ばして参りましたものを、幼稚園の課程を全然踏まない子供達と一緒にして、「よそみをしないで」「手は膝の上に」「式に扱はれる事を思ひます、」「僕もう本を買つたんだよ」喜ぶ様を見ますのが淋しい氣がして堪りませんでした。望み得るなら、そして容れられる事なら少くとも三年生迄は、それが駄目ならせめて一年生の間だけは幼稚園と同じ生活をさせていたゞきたい、でもそれすら叶はない事から、幼稚園にゐる間に出来るだけ順應した生活を経験させ、幼稚園と小學校とが

兩方から歩み寄つて、恰度眠つた赤ん坊を母の手からソーツミ軟らかい臥戸に移す様に幼児の純真な魂をおびやかす事のない様にしなければならぬと思ひまして、校長(園長兼任)にも度々お願ひをして御理解いたゞき。昨年は對外的な色々な問題を押し切つて一學年三組の中一組を幼稚園學級として、幼稚園から行つたものだけを一組にしていたゞきました。それを大層御熱心な先生がお持ち下さいましたので、私達さんなに喜び安心して送り出したか知れませんでした。それから一年間絶えず連絡をこりまして一人一人に就いて話し合ひます外、時々授業を參觀させていたゞき、じつとその成育、變化を見つめて参りました。一年たちました今日ではかなりはつきり結果が現はれて参りまして、唱歌・圖畫・手工などは他の二組とは段違ひで、幼稚園組は今の二年と同じ程度、或はそれ以上に進んでゐるさうでございいますし、學科の成績も一般によく、特に發表觀察の方面がすぐれてゐるこのお話で、それは勿論幼稚園に入れる程の御家庭は相當教育に熱心だからでもございませうけれども、兎に角幼稚園保育の力だに大いに自信をつけた様なわ

けでございいますが、最初の一學期は團體生活に必要な自己中心主義ならざる事、整理整頓、後始末よき事、なごの長所はあつても、随分お困りになつた事が、むしろお困りになつた事の方が、多かつた様でございました。今それらを述べ、本年はこうしたいと思つて居ります事を少し申し上げます。

先づ第一に始業終業のベル又は鐘に對して全然無關心であること。これには随分お困りになつた様でございました。私の園の様に名前は附屬幼稚園でなくとも、小學校の校舎の一部を借りて居りますこと、自然學校の始業終業のベルが聞えて参ります。入園當初は、けたゞましいベルに驚いて何をして遊んでゐても反對的に驅け出して私共の所へ集つたものでございますが、いつか慣れて、それも自分達の生活に關係のない事を知りますこと、そんなにけたゞましく鳴り響きましても耳にもはいらぬ様でございました。その習慣がしみこんでゐて、始まりのベルがなつても平氣でしたい事をして遊んでゐる、先生がお部屋へおはいりになること、僅か數人の子供しかゐない、大騒ぎで校内をあち

こち驅け廻つて呼んでお歩きになる、そんな事が随分長く續いた様でございました。時には先生がお氣付きにならなければ一時間遊んで、終る頃ヒョッコリはいつてきたりする事も珍しくなかつたさうでございます。

これなき幼稚園で小學校入學の前一ヶ月位の間に一週一度でも二度でも、小學校のベルをもミゝして、例へばおはなしの濟んだあまで「今は小學校の方達もみんな遊んでいらつしやいますけれど、今度ベルがなるミお部屋へはいつて勉強なさいます。皆さんもうじき小學校ですから、今日は同じ様にベルがなつたらお廊下に竝んでお遊戲室に行つて、又今度ベルがなる迄レコードを聴いたり、歌つたり、お遊戲したりしませう」。さういふ風に扱ひましたなら、或は却て喜んでし、無意識の中にベルで始まりベルで終る生活を了解する事が出来、小學校へあがつてから一度二度の御注意で容易に、そして自然にその習慣に溶けこんでゆけるのではないかと思ひます。

## 第二は自分の仕事が済むミサッサミ遊びに出る事。

これは前の問題よりもつミお困りになつた様でございます。

す。幼稚園ではおしごが早く出来た兒から遊びに出ますのでそれを少しもいけないミは思はず、小學校へあがりましても算術や書取其他何でも自分さへ出来ればお意張りで「先生もう遊んで来ていゝでせう」ミ云つてぎんぐ遊びに出てしまふのださうでございます。それに就きましては小學校の先生も「早く出来たものには何かちがつた仕事と與へられる様にもう一部屋あるか又はグループ制度に出来るミいゝのだけれど。又そんな時はぎんぐ遊びに出したいけれど他の組との關係もあり、又校内のきまりもあつて」ミお洩らしになりました。同じ事をさせましても或子供は十分で完全にし終へ、或子供は三十分四十分もかゝつて出来上らない事は多うございます。それを早く出来たものはたゞ待たせて置く、しかも、おしやべりをしてはいけません。まだしてゐる人の邪魔をしてはいけません。誰です鼻紙を出していたづらをしてゐる人は。等々ミ云はれるのではほんミうに可愛さうでございます。是は小學校の先生の教授手腕に恃む外致し方ない様に思はれますけれど、時には幼稚園でもあまり無理でない程度に足竝を揃へ、早い人はお

そい人の邪魔にならぬ様に靜かに待つて進む様に指導する  
必要がありはしないかと思ひます。けれどもこれは小學校  
に幼稚園生活を知つていたゞく様に幼稚園が努力し、向ふ  
から歩みよつていたゞかなければならない問題でございま  
せう。

### 第三はグループ生活の習慣からぬけられない事。

小學校ではグループ制度にしたいとお思ひになりました  
も教室や人數の關係で實行が困難な様でございます。小學  
校は小學校、幼稚園は幼稚園、幼稚園に居る間はそんな事  
迄する必要はないと云へばそれまでゝございますけれど、  
少くも入學前の一ヶ月二ヶ月の間に、たまには小學校式  
に扱つて見てもいいのではございませんでせうか。私の方  
の園では二人掛の机、四人掛の机、八人掛の机と三種類作り  
ました。で、無理のない機會を捕へては、あながち黒板の  
方を向かなくても時には窓邊の鉢植の方へ、時にはお部屋  
の隅の戸棚の上の玩具の方へ皆向かせてして居りますが、  
こうしておきましたら、小學校へはいつて今迄のグループ  
制度からいきなり皆前向け制度になりましたも、急激な變

化の爲受ける刺戟が餘程ちがひはしないかと思ひます。

もう一つ、さうも幼稚園から來た子供は、先生を甘く見  
て、云ふ事をきかなくて困るさういふ様な事を仰言います方  
があるやうでございますが、それが事實なら保母の大きな  
恥だと思ひます。多數の父兄の中には、親心を許さうには  
あまりに得手勝手過ぎると思はれる様な人もあつて、當然  
自分の子供が悪くても叱られるのを喜ばないで何彼と面倒  
な事を云はれる事もありますけれど、そんな父兄におもね  
て、又ははきちがへた自由主義から、幼児がごんなに間違  
つた事をしてても大目に見、躰けと申しませうか徳育方面を  
輕んじた結果幼稚園の先生を召使同様に考へる子供を作り  
上げてしまふ事になるのでございます。保母は或時には何  
十人かの子供達のお母様であり、お姉さんであり、親しい  
叔母さんであり、或時は仲のよいお友達でなくてはならぬ  
事は云ふ迄もありませんけれど「もうこんな事するの止め  
ませうね」とそつと膝に抱いて云つた時、すぐきいて呉れる  
様な力は持つてゐなければいけないと思ひます。かみ云つ  
て急に怖い顔をしたのでは切角の今迄の保育が零になつて

しまひますけれど、そしてこんな事は僅かの間にしたつてうまくいきはしないのですけれど、一人でも「いやだ」と云ふ様な子供をお持ちの方は、せめて此の二月三月はその方面に力をおいれになつたらさ存じます。

次にこれは直接幼児の保育に關係はございませんけれど、保姆の仕事として、

一、あらゆる機會にあらゆる方法で、積極的に小學校の先生方に幼稚園を理解していただく様に努める事。

二、此方からも、許される限り參觀をしたりお話を伺つたりして小學校生活を知る事。

三、園児の心身の發育狀況、性情、家庭の事情等を出来るだけくわしく、小學校に御報告申上げる事。

等を忘つてはならないと思ひます。

私の園が小學校に附屬して居ります爲に、今迄申述べました事が大層偏してゐて一般性がない様にお思ひになるかも知れませんが、私は公立も私立も皆同じだと思ふのでございます。

「自分の幼稚園は少しも小學校と關係、連絡がありません

んから、まさか後は野となれ山となれと思ふわけではありませんが、私達の力ではさうにも出来ませんので、幼稚園は幼稚園で幼稚園に居る間を理想的に保育してゆくより仕方がありません」。

と澄ましてばかりしないで、自分の子供なり弟妹なりの受持の先生を訪ねて御注意を伺ふのを同じ氣持で、育てた子供達のゆくべき學校を訪ね積極的に連絡をきつて行つたら如何でございませう。そこ迄行つてこそ始めて幼稚園の保育を完全に生かしたものと云へるのではないかと思ひます。

遠い理想かも知れませんが、幼稚園が力を合せて眞剣にぶつかつてゆきました時、今の小學校低學年教育が次第に形をかへてゆくのではないかと、私は思つて居ります。